

“目連戲”を談ず

我が故郷には一種の民衆芝居があつて、「目連戲」と言い、あるいは「目連 母を救う」と称する。毎年夏になると、城内の街坊、田舎の村々がお金を出して芝居をし、鬼神を敬い、災害を祓い、併せて自分たちも楽しむ。演ずる芝居には徽班、乱弾や高調などの当地の一座があつて、「大戲」があり、目連戲がある。最後のは純粹に民衆的で、演ずるのはただ一幕、つまり「目連 母を救う」で、使う言葉は本物の土地の言葉で、衣装はみな極く簡陋で古物である。それで俗に衣冠整わざることを「目連行頭」と言う。演技する人はみな職業的な俳優ではなく、たいていが水郷の農夫で、なかには大工、左官、水夫、駕籠かきなども混じっていて、臨時に一座を組み、秋風が吹く頃になると、解散し、それぞれが自分の仕事をしにゆく。

十六弟子の一人である大目犍連は民間では通称「富蘿蔔」と言う。『翻譯名義集』によると「目犍連」は、「『浄名疏』に、『文殊問経』は“葉茯根”と翻す、父母好んで食らい、以て子の名に標す、と云う。」田舎の人間の話も典拠があつて、侮れないことがわかる。富蘿蔔の母は劉姓というから、“劉氏”と称する。劉氏は仏法を信じず、犬の肉の饅頭で僧をもてなしたので、死んだ時に五本槍の刺股で捕らえられ、地獄に落ちた。後に目連が法力を使い果たして、ようやく彼女を救い出す。それでこの芝居もお終いとなる。夕方から始めて、そのまま次の日の明け方まで、夏の夜は短いけれども、八九時間はあり、やることと言えばこの一件だけ。首尾以外、その中の七、八割は、一場一場滑稽な事を演じ、目連が途中見たこととする。観衆が最も興味を感じるのも恐らくこの部分であろう。田舎の人間がいつも喜んで“舛辞” (sɔŋgɔ) [表の表現と裏の意味が逆になる言葉か] や“冷語” (əŋgɔ) <sup>i</sup> [皮肉] を使うのは、“目連趣味”の余流だと言える。

これらの場面で有名なのに、「狂った女を背負う」があり、一人が女性に扮して、胸に老人の頭をつけ、老翁が病気の嫁御を背負って行くのを演ずる。「左官が壁を塗る」というのがあつて、左官が最後には自分を壁の中に塗り込めるのである。「□□水を汲む」は、「最初の約束は十六文で一荷だったのが、そのうちなぜだか、一文十六荷になってしまった」と訴える。だから一日水汲んでたったの三文の工賃しかないのだ。「張蛮 親父を殴る」は、張蛮の親父が殴られて、皆の衆に向かつて言う。

「昔俺たちが親父を殴った頃は、親父が逃げればそれまでよ。ところが今じゃ、親父が逃げてもまだ追いかけて殴ろうとしやがる！」これこそまさしく常見する「世道衰微して人心古ならず」という二句の最も妙なる通俗的解釈である。又金持ちの座敷に入り込んだ人間が、座敷に掛かっている掛軸を見て大声で読み上げる。

「お日様いでて真っ赤か、  
花嫁行水、爺が来る。  
お父さん、来ないでちょうだいな、  
お母さんにもあるでしょう。  
(Thaayang tsehchir wungbangbang,

Hsingyur hunyoh kong letzang;  
“Kouk Kong yhe, forng letzang;  
Borbo yar yur hang!” )<sup>ii</sup>

おお、「唐伯虎題す」とな！高雅、高雅！」

こうした滑稽は当然それほど“高雅”ではない。しかしながら多くは健全であって、士流の捨くれたものとは違い、民衆の滑稽趣味の特色だと言えよう。我々は初めから終いまで目連戯を一通り見れば、少なからぬ民間趣味と思想を理解することができる。これには原始的なものが多いけれども、実に国民性の一斑であり、我々の趣味・思想とも決して無関係ではない。だから我々が少しでも知ることは有益なのである。

もう一点、わたしが知っている範囲内で、これは中国に現存する唯一の宗教劇である。人が喜んで目連戯を見たがるところはその中の多くの滑稽な場面であるけれども、全本の目的は明らかに仏法を称揚することであり、仔細に考えてみると水陸道場あるいは道士の“煉度”の戯劇化と言っても過言ではない。我々はインドにこうした戯劇の宗教儀式があるのかどうかは知らないし、あるいは中国で起った国産品なのかも分からない。要するに宗教劇の一形態たるに恥じないことは、とても注意すべきである。滑稽分子が母屋を奪うのは、もともと自然の成り行きであって、ちょうど外国の幕間劇 (Interlude)、狂言 (Kyogen) の発生と同様であり、また僧や道士が法事をする時に男役と女形の寸劇を歌うのと同じの状況であろう。

残念ながらわたしは十四の時に故郷を出て、最も近い時期でも目連戯を見たのはすでに二十年前で、しかもまた一部分を見ただけなので、記憶もおぼろになってしまった。もし篤志の学会があれば、いまという旧風俗がまだ消滅しない時期に、お金を出して状況をよく知った人を派遣して調査し、脚本を記録すべきである。それは学術面においても当然裨益があるはずである。イギリスのフレイザー (Frazer) 博士は野蛮生活の研究を極力提唱して、南北極の探検などは後にしてもよい、というのはその氷はどうせすぐに解けるはずはないからと考えている。中国の蒙古・チベット・回族・苗族の生活はもちろん大いに研究の値打ちがあるし、本族の中にもとても多くの研究できるものがある。あるいは今までちゃんと整理研究されたこともなく、今はただ研究する人を待っているものがあると言ってもよい。(一九二三年二月。)

※初出：1925年2月23日『語絲』第15期

---

i, ii 紹興のことばをローマ字にしたものだが、国語ローマ字に従ったものか、その国語ローマ字も標記のし方の変遷があるようで、はっきりしない。上の「舛辞」「冷語」は国際音声字母で標記されているようだがそれもはっきりしない。ただ原文では「舛辞」「冷語」の標記が逆になっているのを正した。